

# 塾と家庭教師と

## 親の心

立川 正久

塾と家庭教師が大流行しています。これは親達が、「我が子を育てる」ことが個人に取って一番大切な仕事であると考え、その為に少人数、一対一、での「目の行き届いた教育」を欲しているからに外ならないのです。ところで「次代を背負う人を育てる」ことが、国にとって何よりも大切な仕事であることも火を見るより明らかなことです。ですから国は、「目の行き届いた教育」をするために、国家予算では、少くとも義務教育の九年間の為に、どんなに財政が苦しくても、すべてに先がけて、充分な金額を用意すべきである筈です。ところで、「目の行き届いた教育」をするには、最大限何人の学級編成が適当なのかと言うことですが、先に国は、取りあえず第一段階として四〇人学級にするという決定をしながら、凍結して実施せぬままにしていますが、私の学校での被教育者としての廿年間と教育者としての四〇年間の経験から申せる

ことは、小学校二年までは廿人、六年までは卅人、中学校は卅五人が、上限であると考えます。こうすれば、四〇又は四五分間の授業中に一度は受持の子を、個別に観察し、会話をすることが、やっと出来ます。それで始めて一人一人の特性を小さい頃から見つけ出し、伸ばす為の個別指導を自信を持って行える様になるでしょう。今、我が国の教育制度上で一番欠けているのは幼少年時代に各人の優れた特性を見つけ出し、それを大切に育てて行ける為の「目の行き届いた教育」に対する国家の真剣な配慮です。戦後の四〇年間に、何度か教科内容の改変が行われて来て、その成果は、我が国のGNPの躍進で証明されていますが、残念ながら少なくとも自然科学の分野だけに限って見ても独創的成果を挙げた者は、人口の割合から見ても少なく、これらの国際競争に我が国が生き残る為には、甚だ淋しい限りです。これは決して日本人の素質の問題では無く、「多人数学級編成」の為に、目の行き届かぬ「教育しか出来なかった教育制度上の根本欠陥の結果の一つに過ぎぬのです。今こそ国の豊かさを教育にこそ還元すべき時です。教育は、「人と人との作用である」と言う根本に立てば、当然の帰結である良い

教育は、小人数、小規模校で行うべきであると言う自明の理に、なおい目を瞑り、枝葉末節の制度のみをひねくることを繰返し砂上に楼阁を築くの愚を直ちに止めるべき時です。

話は、お金のことになりますが、一〇年間掘り続けて、やっと昨年完成した青函トンネルの総工費が、アメリカの空母カールビンソンの一せきの建造費と、偶然にも全く同じであることを思うとき、人間の行為として最低の戦争の準備が、如何に無駄な金使いであるかを思い知らされます。こんな目で政治家達が、我が国の教育の現状をしっかりと見つめて、先ず何より「目の行き届いた教育」実現のために、お金を充分につき込まねばならぬことに気付いてくれて、その施策に真剣に取り組んでくれる日の来ることを切に祈るのみです。この為には、政治家を常に与野党伯仲下に置いて、日々緊張して活動し、国民の意志を真剣に聞き取れる様にしておかねばならないでしょう。

最後に「戦後で、今ほど有為の人材を教育界に集めることの出来る好機は再び訪れ無いであろう」と言うことを申し添えたいと思います。

(たてかわ まさひさ 文学部教授)